

## 新刊紹介：Helen Louise Cowie, *Victims of Fashion: Animal Commodities in Victorian Britain*, Cambridge: Cambridge University Press, 2021.

永野 杏奈  
NAGANO Anna

東京外国語大学大学院博士前期課程  
Tokyo University of Foreign Studies, master's student

キーワード  
イギリス史 科学史 人と動物の関係史

### Keywords

British History; History of Science; History of Animal-Human Relationship

原稿受理日：2022.12.25.

*Quadrante*, No.25 (2023), pp.341–342.

人と動物の関係史は1970年代頃から研究が行われるようになった分野であるが、当初関心が集まった政治史だけでなく文化史研究もその地位を確立して久しい。その中でも Helen Louise Cowie による *Victims of Fashion: Animal Commodities in Victorian Britain* は、19世紀イギリスで流通した動物製品を取り上げ、動物の保護施策や消費者の意識の変容を、文化史や科学史といった多角的視点から論じている。イギリス・ヨーク大学教授である Cowie は、19世紀イギリスを中心に人と動物の関係史を研究し、多くの著作を出版している。

本書は序章・本論6章・終章から成る。序章では、本書が科学者や女性というアクターに着目し、社会史的視点を持つという方針を示す。第一章 Murderous Millinery「残忍な婦人用帽子製造業」は、女性が羽根飾りの購買者層でありつつも、動物保護団体では運動の中心を担った二面性を指摘する。第二章 The Seal and His Jacket「アザラシ・オットセイとその毛皮」は毛皮製品として需要の高いオットセイ、第三章 Is the Elephant Following the Dodo?「ゾウはドードーに続くのか?」はプラス

チックが普及するまで櫛やピアノの鍵盤、カトラリーの柄などの幅広い日常製品に使用されていた象牙を扱う。第四章 Silk of the Andes「アンデス山脈のシルク」は、ペルーを原産とするアルパカのイギリス・オーストラリアへの自然化 (naturalization)<sup>1</sup>—ある動物を原産国から別の土地に移動させ、その土地での繁殖を目指すこと—をテーマとし、それを可能にするイギリスの科学者らの帝国主義的態度についても検討する。第五章 Bitter Perfumes「苦痛を伴う香水」は動物性香水を扱い、19世紀後半に代替品としての植物性香水が消費者の人気を集める様子を描く。ただし、嗜好の変化によって動物利用がなくなるわけではなく、その後合成香料の安全性担保のための動物実験が拡大することも最後に付け加えている。第六章 Monkey Business「モンキー・ビジネス」は、サルやオウムといった外来種の動物が労働者階級を含む様々な家庭にペットとして普及する過程に生じた、輸送上・ペットショップ・家庭内での虐待について扱う。終章は、動物製品が抱えた問題・当時の解決策・どのようなアクターが関わったかについて6種類の動物製品に共通する点をまとめる。

<sup>1</sup> 詳細については以下を参照されたい。伊東剛史「帝国・科学・アソシエーション——「動物学帝国」という空間」近藤和彦編『ヨーロッパ史講義』山川出版社、2015年、pp.145-164。



このように Cowie は多様な動物を扱うのみならず、19 世紀に存在した動物利用のあり方について包括的に記述している。それは服飾や日常製品としての加工利用、動物園や家庭内の生きた状態の鑑賞・愛玩という、現代と非常に似通ったものである。さらに、そうした動物利用を支えるために、科学者が主導する動物の自然化や家畜化が発展したことを指摘する。

本書の最大の特徴は、当時の科学と動物製品の関係を全編にわたって示す点である。動物製品の貿易拡大の背景には、蒸気船や鉄道という輸送技術や、動物の加工技術（冷蔵や化学染料）の発展があったことに、本書は言及する。加えて、プラスチックなどの科学技術の発展によってもたらされた代替品についても本書は記述している。これまで科学史が動物を扱う場合には、主に動物実験や家畜化など、動物を管理しようとする科学者と、それに抵抗する動物との対立的な関係が、注目して語られていた。しかし本書が指摘した、科学技術の発達が苛烈な動物搾取を緩和させる側面についても、今後は研究が推し進められるべきだと考える。この点により、本書は人と動物の関係史のみならず、科学史の文脈でも参照すべき文献となるであろう。